

# La Lettre

DE LA FONDATION FRANCO-JAPONAISE SASAKAWA/Bureau de Tokyo



笹川日仏財団  
ニューズレター  
Vol. 2 No. 3



## たかがコミック、むねどコミック アートとして認知されているフランスコミック

日本におけるフランス年」の催しは、全国主要都市のデパート、美術館、イベント会場など様々な場所で多岐に渡って展開され、シンボルマークのひなげしの花もよく目にする。

ともアメリカのコミック文化とも一線を画し、独自の文化を築いたのがフランスBDなのである。

日本の漫画で連想するのは週刊誌だが、BDの作品集は、いずれもハードカバーの単行本でA4サイズのオールカラーといった豪華本だ。

た作品集や原画を目のあたりにすると、一コマ一コマが独立した一枚の絵としていかに完成されているかに驚かされる。フランスではBDが映画などと並んで一つの芸術作品として認知されている。デザイン、イラストなどあらゆるジャンルのアーティストに影響を与えているのも頷ずけるというもの。ミッテラン大統領の時代にはBD専門の国立美術館が設立。文化省の後援によるフェスティバルが毎年開催されているともいう。



ようになつた。九月八日から一三日まで、東京日本橋三越デパートで開催された『フランスコミックの世界展』は、フランスコミックを通してフランスの側面を新たに知る機会となつた。

フランス語圏の国ではコミックのことを「バンド・デシネ」、略してBD（ベーデー）と呼んでいる。その歴史は一九世紀に遡るが、フランスが世界に誇るBD大国であることは日本ではまだ知られていない。日本の漫画文化

ともアメリカのコミック文化とも一線を画し、独自の文化を築いたのがフランスBDなのである。

日本の漫画で連想するのは週刊誌だが、BDの作品集は、いずれもハードカバーの単行本でA4サイズのオールカラーといった豪華本だ。人気作家でもアシスタントを使わずに書き下ろしで一、二年に一冊のペースで仕事をしている。たった四八頁の作品に七年の歳月をかけて完成させた作家もいる。展示され



フランスの現代コミック作家の作品がずらりと並ぶ会場

今回の展示は、そのフェスティバルのポスターから

特にBDでSFワールドを切り開いたメジエールは、昨年話題となつたりユック・ベッソン監督、SFアクション映画「ファイブス・エレメント」の美術デザインを担当。映画のオリジナル・デザイン画やスチール写真なども同時に展示され、サイン会も持たれて、ファンとの暖かい意見交換の場ともなつた。

同じコミックでも、両国の文化の違いによつてこれほどまでに捉え方が違うとは。たかがコミック、されどコミック。その奥行きを知らされる催しとなつたのである。



# 子供の声に耳を傾ける

## 21世紀に向けて 地球時代の教育とは

『日本におけるフランス年』を記念し、日仏間の教育の交流を図ってきた日仏教育学会がフランスから教育関係者を招き、「日仏教育シンポジウム TOKYO 1998」を日仏会館で開催。「日仏教育交流の歴史と展望」を総合テーマにまだ残暑の残る九月四日から八日までの五日間の日程で行なわれた。

東京恵比寿のガーデンプレイス前にある日仏会館のメイン会場である約百人程入るホールに客席は、フランス人も含め教育現場に携わる教師や研究者たちが集った。連日通う人も多くいて熱気の高まった質疑応答からは逆に現実の教育問題の厳しさを垣間見させた。

シンポジウムは日本の明治期の教育を皮切りにスタート。その後は現在の切実な問題ともいえる教育改革、また幼児教育の現場からみた子供の発達などその日毎のテーマによって、様々な角度から教育を語る場となった。

子供の概念、教師の役割などの変化は従来の価値観では把握できない状況にまで陥っているのが現

状だ。その中で教育改革は、日仏双方にとって急務となる問題である。そこで二日目はフランスから現在の国家教育監査局長で教育政策顧問のアンドレ・ユスネ氏を、日本からは現在文部省中央教育審議会委員であり、東京家政学院大学学長の河野重男氏の両氏を招いた。

午前中は、両氏の基調講演だが、まずユスネ氏から「二十一世紀を準備する教育改革」と題して現在進行中のフランスの教育再建の動きが発表された。

**前代未聞 全国民を対象にアンケートを実施したフランス**

フランスでは長い間、個人を尊重する教育がなされてきたために、社会との統合意識が希薄になり個人的権利と集団的拘束の間の矛盾が表面化。会社や社会のために個人を提供する発想の薄いフランス人の意識が、経済成長を脅かす原因の一つとして社会問題化し始めている。

「そのために教えるべき知識とは一体何か。フランスが徳育よりも知育を重んじてきたことの批判は二十年前からありましたが、今、新たな知が問い直され始めています。たとえば高校カリキュラムでは、知識の詰め込みに心血が注がれ、いわゆる知を深める時間が持てませんでした」

その教育制度改革における再建の動きは、民主的な手続きとして

全国民を対象にしたアンケート調査の実施だった。この調査に一五〇万人の高校生が声を寄せ、教師も半分以上が回答。親の意見なども含めて広く集められた。

「今までカリキュラム策定にあたって私たちは、様々な分野の学者に意見を求めてきました。しかし今回は教育の原点に戻り、子供の声に耳を傾け始めることを現大臣が始めたのです。つまり子供が、教育における一つの社会的主体として認知され始めたのです。これはフランスにおいて前代未聞の方法であり、新たな展望を開いていくことと信じています」

河野氏からは、平成八年に発足した第十六期中央教育審議会の第三十回答申の骨子が述べられた。

「現在の日本の子供たちが運動するのは一日平均二時間。逆に室内ではTVゲームなどで五時間も遊んでいるといえます。これでは現代の子に成人病の影を落とすのも当然。知、体、徳のバランスを崩した現代の子に、何としてでも生きる力を養わなければなりません」

「生きる力を蓄え、ゆとりある教育」を標語に掲げた答申。内容の中高一貫教育の選択的導入、週五日制の下での教育内容の三割削減などを紹介した。

**不透明な時代を迎えて論じられる  
エリート教育必要性の有無**

午後は、日本側から元中央教育

審議会委員だった堀尾輝久東京大学名誉教授、現中央教育審議会委員の坂元昇メディア教育開発長官、大阪大学名誉教授の麻生誠氏の三名に加え、フランス側からカイン大学教授のアリ・ペイロニ氏を迎えて意見交換がなされた。

それぞれ午前中の基調講演の感想を踏まえた上で自身の意見発表をしたが、話題の中心はやはり日本の中教審の答申内容である。「生きる力とゆとりを養う教育」だった。この答申は果たして子供たちの悲鳴から発しているのか。各氏から手厳しい意見が述べられた。

「ユスネさんの報告で感心したが、日本の教育改革も子供を参加させるべき。日本の子供たちは今、居場所を見失い自信を失っている。その子供たちの声に中教審など改革を語る人々がどれだけ耳を傾けているのか疑問。現在の動きは財界主導の改革にすぎない。子供こそ教育改革の出発点はずだ」と開口一番、堀尾氏は語った。

迎える二十一世紀は先行き不透明な時代。そこでそれを乗り越える具体案に話は及んだ。特に少数のエリート養成教育が、中教審の答申内容に内包されていると指摘。この教育の必要性の有無が日本側から提案。その中ですでにエリート教育の進むフランスにおけるペイロニ氏の報告は興味をそそった。「フランスではある時期、エリート教育に反発が生じ、中流及び庶民階級にも門戸を開きました。し

かしそれがかえって差別を助長した結果となったのです。本来なら、その原因を究明して改革すべきですが、今だにそのまま。それは伝統の恩恵に浴した上流の社会層が本質に目を背け、学校形態を崩すことに消極的ではないのが原因です。またそれは移民の教育問題まで派生し、教育の格差は広がるばかりなのが現状です」

フランスでは、エリート教育の場であるグランゼコールの存在意義が問われており、大学教育制度との統合を目指しているという。しかし深刻な少子社会を迎える日本だからこそエリート教育は必要だと麻生氏は語り、一人一人の能力や適性に応ずる適能教育の徹底を提案。それには教師の力量が不可欠と提言した。こうした様々な意見の中で共通に語られたのが新時代の教育理念である。

「学問とは個人のものではなく、社会や人類普遍の課題に因應するための教養を身につけること。決して分らない者は分からなくていいという特権階級のエゴイズムの発想の元にあるものではありません。国民一人一人と共有する社会性や公共性の元にあるべき。そして世界の人々と繋がっていくもの。今こそ教育に対する世界規模の新しい思想が求められています」

ユスネ氏は午前中、高校時代に哲学を学ぶ重要性も指摘していたが、それを持ち出して共感する堀尾氏だった。

## 情報機器発達で

### 自ら発達する学びの時代到来

二十一世紀の教育を語るのに欠かせないのが、情報通信ネットワークやマルチメディアの有効活用だ。両国にとつて興味深い問題を坂元氏は日本のメディア教育の現状を踏まえながら将来の展望を語った。

「大学ではすでに、全国八〇以上の大学で通信衛星を結んだ会議や授業が持たれ、他国との授業交換も実施され始めました」

メディアを使つての遠隔授業による単位取得も一部認められるようになり、一つの大学に所属しながら、他大学の希望の教授から学士などに必要な単位を取得することで、大学の持つ意味そのものを考え直す時期が来ている。

「長い間、人間の学びは受ける学びでしたが、情報機器の発達で、情報を自ら選び、創り、発する学びへと変化していきます。お互いの異文化の特徴を認めつつ自分の文化を見つめ直し、その良さを発進すること。これはまさに学びの変革の時代到来です」

会議の最終日には総括が行われ、日仏の視点を交換しながら直接に対話することによって、それぞれを対象化することができるとして、日仏の研究者による会議の有効性を認める一方で、そこに第三のファクターを折り込み、南北問題など地球の問題を日仏の共通

の課題として捉えていくことの重要性や、今後も両国の研究交流を継続していくことの必要性が挙げられていた。

環境問題など地球規模で考えざるを得ない時代に、社会革命をもたらすだろう情報機器が生まれたことを考える時、二十一世紀にむけて地球時代にふさわしい教育の内容をいかに造つていくかを模索し始めたといえよう。



日本とフランスの教育問題のスペシャリストが集まった

## A propos de nos projets...

最近の事業から

### 日仏シンポジウム 「日本に関する情報アクセスについて」

日仏情報交流を活発にするために

日仏図書館情報学会と日仏図書館の共催によるシンポジウムが10月14・15日にパリ日本文化会館で開催された。同会館図書館は日本情報の発信基地としてフランス側の期待も高く、この会議には日本研究者など日本関連の情報を求める学者や図書館関係者など約70名が参加した。日本側からは、

日仏図書館情報学会と日仏図書館の共催によるシンポジウムが10月14・15日にパリ日本文化会館で開催された。同会館図書館は日本情報の発信基地としてフランス側の期待も高く、この会議には日本研究者など日本関連の情報を求める学者や図書館関係者など約70名が参加した。日本側からは、

国立国会図書館の安積氏が日本の政府刊行物の入手方法について説明した他、筑波大学図書館部の内藤氏が96年に開始された奈良先端科学技術大学院大学の最先端電子図書館の紹介など、日本の主な電子図書館の例を挙げ具体的な情報を提供。フランスからは、コレージュ・ド・フランスのドラエ氏等が国立科学研究所の開発する日本情報のデータベースについてパリ日本文化会館の構築方法との相違や類似点を交えながら現状報告した。学術資料の相互貸借については早稲田大学図書館の高橋氏が文部省の大学図書館実態調査結果報告などの統計資料をもとに発表。96年度でも、日本の大学図書館が海外から借りる図書は貸出数の14倍もあり、20年前の25倍と比較してその割合は減少しているものの、いまだに日本側の「入超」となっていること

### Petite note

編集後記

「フランス人はいつも遅刻する」と不満をもらす日本人は多いのでは。しかし今度のトルシエサッカー日本代表監督は時間にとっても厳しい。今後いろいろな言動でフランス人のイメージ一新に期待！?

(M)

### A la carte

ア・ラ・カルト

フランスで人気の日本のManga

フランスがマンガ(BD)大国であることは巻頭で紹介したが、人気があるのは自国の作品ばかりではない。一般書店のマンガのコーナーに行けば日本のマンガの仏語訳版がごく普通に並んでいる。



大友克洋の「アキラ」のようにフランスのみならず世界中で人気のある作品だが、この他にも、高橋留美子の「らんま1/2」「うる星やつら」「めぞん一刻」がロングセラー、鳥山明の「ドラゴンボール」も大人気、三条陸の「ドラゴンクエスト・ダイの大冒険」(仏語版タイトルは何故か「ゴリ」)も巻を重ねている。いずれもTVアニメがフランスで人気を博したため、原作のマンガが紹介されるに至った例だ。他にも映画やビデオの人氣が先行したものに土朗正宗の「攻殻機動隊」がある。日本では社会現象とまでなった新世紀エヴァンゲリオン

の場合もビデオでの発売が先で、貞本義行のマンガ版はその後の映像の影響力の強さを物語っている。新しいものでは「るろうに剣心」「名探偵コナン」「X」など、日本でも今人気のあるものがある。そのまま売られている。人気作品が広まるには時差も国境も関係ないようだ。Manga, Anime をキーワードにインターネットを開いてみると、フランス人の作る、日本のマンガ、アニメのサイトが山のようにある。中には仏語に訳されていない作品のサワリを紹介するページも。そんなマンガが読みたくて日本語の勉強を始めるフランス人もいることだろう。マンガは立派に文化の架け橋なのだ。

### プロジェクト・カレンダー

98年10月～12月

10月12～21日

《日仏社会学シンポジウム》

《高齢化社会の比較社会的アプローチ》

日仏社会学会/於パリ、リヨン、ナント

10月13～14日

《日仏セミナー 労働時間短縮問題》

《フランス人専門家が語る35時間労働》

日仏会館/於東京

10月14～15日

《日仏図書館情報学会・日仏国際シンポジウム》

《日本に関する情報へのアクセスを考察する》

日仏図書館情報学会/於パリ

10月15日～11月3日

《ル・アーブル 徳島高校生交流》

《日本語を学ぶ仏高校生の日本研修旅行》

東京事務局・徳島日仏協会/於徳島

10月21日～11月2日

《シャルル・ドゴール高校日本研修旅行》

《モン・ド・マルサンの高校生ら盛岡で研修》

《不来方高校フランス語コース父母会/於盛岡》

10月23日～24日

《「玉響」パリ公演》

《パリ日本文化会館初の本格的現代舞踊公演》

《加藤みや子ダンススペース/於パリ》

10月23日～31日

《日仏藍染交流》

《日本の伝統工芸の技をフランスに伝える》

藍染文化国際交流会/於パリ

10月31日～11月1日

《日仏ダンスコロラレーション》

《石蹴り遊び》

《世代もスタイルも異なるダンサー達の共演》

ロリター・プロジェクト/於大阪

12月1日

《第2回日仏共同研究グループ》

《地域間協力》

《アフリカ問題を巡る日仏の知的交流》

《現代日本アジアに関する政治経済研究所/於東京》

12月8日

《日仏パネルドイスカッション》

《日仏の第二国協力は可能か》

パリクラブ/於東京

笹川日仏財団ニュースレター

### La Lettre

1998年10月発行 Vol. 2 No. 3  
 発行人：富永 重厚  
 編集人：横山 道雄  
 発行：笹川日仏財団  
 〒108-0073 東京都港区三田3-12-12  
 TEL：03 (3769) 6252  
 FAX：03 (3769) 2090  
 E-mail：matsugam@spf.or.jp

